
滋賀県立大学
地域共生センター
年報2023

目次	1
1 地域共生センター年報 2023 の発行にあたって	3
【2023 年の特集記事】	
特集 地域人材の育成や地域課題解決に向けた自治体との取組	4
2 事業紹介	
2-1 事業一覧	
2-1-1 地域課題の解決と地域共生等に関する教育および研究	6
2-1-2 地域における人材育成等	7
2-1-3 地域との連携および交流	7
2-1-4 生涯学習、リカレント	7
2-1-5 他大学等の連携	7
2-2 地域教育プログラム	
2-2-1 概要	8
2-2-2 関連科目の履修登録状況	9
2-2-3 地域共生論	9
2-2-4 地域基礎科目	10
2-2-5 地域志向科目	11
2-2-6 近江楽士（地域学）副専攻	11
2-2-7 近江環人地域再生学座	12
2-2-8 近江楽座	13
2-3 SDGs 地域化拠点の取組	
2-3-1 SDGs に関する取組の全体像	17
2-3-2 キャンパス SDGs びわ湖大会 2023	18
2-3-3 教育、研究、地域への波及	21
2-4 学生への食糧支援の取組	
2-4-1 概要	22
2-4-2 支援の経過	22

2-5	地域連携	
2-5-1	滋賀県立大学地域連携相談窓口の相談対応	23
2-5-2	県内自治体等との連携	25
2-6	生涯学習	
2-6-1	公開講座	26
2-6-2	公開講義	26
2-6-3	リカレント教育	26
2-7	他大学等との連携	
2-7-1	環びわ湖大学・地域コンソーシアム	27
2-7-2	びわ湖東北部地域連携協議会	27

3 スタッフ紹介

3-1	地域共生センターの体制等	28
3-2	教職員の活動	29
3-2-1	受賞、著書、論文	29
3-2-2	学会発表	29
3-2-3	研究会、講演会、特別講義等での発表	29
3-2-4	研究資金・補助金等	29
3-2-5	社会への貢献（各種委員会など）	29
3-2-6	マスメディアとの対応	31
3-3	2024年度の教職員メッセージ	31

I 地域共生センター年報 2023の発行にあたって

滋賀県立大学地域共生センターは、「地域に根ざし地域に学び、地域に貢献する」ことを基本理念とする県立大学における地域連携の窓口として、地域課題の解決に向けた教育・研究の推進、地域に貢献できる人材の育成、地域連携に関する相談等を行っています。

令和5年度(2023年度)は、5月には新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類に変更されたことから、授業や課外活動など大学活動にかかる行動基準の適用がなくなり、3年以上にわたり一定の制限のもとで様々な工夫を凝らしながら行ってきた事業や活動が少しずつ活発化してくる様子が見られました。

本学の学びの特色である地域教育プログラムにおいて、全学必修の「地域共生論」では、教職員がこれまでの経験を活かして、複数の教室を使って講義をライブ配信し、グループごとの活発な意見交換を通して学生のコミュニケーションや学びが深められるよう授業を進めました。また、地域の課題解決に向けた実践力を身に付ける「近江楽士(地域学)副専攻」科目では、現場でのフィールドワークや事業計画の検討・提案等を通して、学生と社会人がともに学び、新しい地域社会を切り拓くイノベーターやコーディネーターを養成することを目指す「近江環人地域再生学座」では、先進的な実践現場での体験や意見交換、成果報告交流などを通して、それぞれ学びを深めることができたと考えています。

学生主体の地域貢献活動である「近江楽座」においても、対面でのイベント開催ができず地域の方々との交流が十分できなかった活動もありましたが、地域における様々な行事の再開とともに、あらためて地域の方々とのつながりを大事にして各プロジェクトが活動を進めてくれています。平成16年度(2004年度)に始まった近江楽座は20年目となり、これまで延べ

448 のプロジェクトが活動し、延べ1万人を超える学生が参加しています。主体となる学生が年々入れ替わっていく中で、活動が長きにわたり様々な形で継続できていることは実に素晴らしいことであり、地域に根ざし地域に学ぶ滋賀県立大学であればこそその取組です。活動を支えていただいている各地域の皆様へ心から感謝を申し上げますとともに、意欲を持って取り組んでくれている歴代の学生の皆さんに敬意を表したいと思います。

地域貢献人材の育成に関しては、日野町様との連携事業では町職員として働く魅力を考えるワークショップを新たに行い、滋賀県中小企業家同友会様と連携したリカレント教育プログラムについても一部改善を加えて、それぞれ2年目の取組を進めることができました。

また、自治体や企業はじめ様々な方々から本学との連携に関するご相談をたくさんいただいております。引き続き大学の窓口として地域連携コーディネーターを中心に皆様との連携・調整に努めてまいりたいと考えております。

このようにセンターとして様々な取組を進める中で地域住民の皆様、自治体、企業、団体等多くの方々から格別のご支援ご協力をいただいておりますことに、あらためて感謝を申し上げます。地域の活性化、課題解決に貢献できるよう、各地域の皆様との連携をさらに深めて取り組んでまいります。益々の御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年3月

地域共生センター センター長 中 嶋 毅

【2023 年の特集記事】

特集 地域人材の育成や地域課題解決に向けた自治体との取組

少子高齢化や人口減少が進行するなか、地域に活力を生み出すため、2022年に日野町、一般財団法人地域活性化センター、滋賀県立大学による3者協定（自治体、地域活性化センター、大学の3者協定は全国初）を締結し、地方創生を担い、地域づくりの中核となる人材を育成することを目的とする新たな取組をスタートし、2 年目となる2023年度は地方公務員として働くことの喜びや面白さについてワークショップを行った。

Ⅰ 日野町×滋賀県立大学ワークショップ

「はたらくよろこびとまちのしあわせ」の実施

（1）ワークショップ実施の経緯

人口減少・少子高齢化社会にあって、業種の違いにかかわらず、人材の獲得が急務になっている。自治体においてもそれは同様で、魅力的な人材を確保するためには、地域に根ざし、地域づくりの支えてとしてはたらく町役場職員自身が、まちの魅力やまちではたらくことのよろこびや面白さを表現し、発信できることが大事あり、滋賀県立大学では、日野町と連携して、優秀な人材の確保につなげるためのワークショップに取り組むこととなった。

（2）ワークショップの概要

今回のワークショップでは、日野町役場の職員と学生たちとの対話型ワークショップを通じて、地域づくりの最前線ともいえる地方自治体の仕事や地方自治体（町役場）ではたらくことの喜びやしあわせについて考え、言語化することを目指した。

開催に際し、事前準備としてシステム思考法の授業において、学生が日野町と滋賀県立大学の連携による地方創生人材育成の全体像をまとめたほか、ワークショップ開催前に日野町役場職員に対し、町役場で働くことや町の魅力などについてアンケートを行った。



ワークショップの様子

2024年2月21日（水）に開催したワークショップでは、最初にガイダンスとして、事前に準備した地方創生人材育成の全体像のまとめや役場職員へのアンケートへの結果について学生へ情報共有したほか、アイスブレイクとして簡単な自己紹介を行った。

その後、日野町役場の各課を訪問し、実際に働く現場を見学した。昼食時には、ランチセッションとして、日野町役場職員と学生の意見交換を行った。

午後からは、学生が2人1組となり、日野町役場で働いている職員に対し、日々の業務で特に満足感や達成感を感じる瞬間や町職員を目指す学生や新たな人材へのアドバイスといった内容のインタビューを実施した。



インタビューの様子

ワークショップのまとめとして、日野町での「はたらくよろこび」と「まちのしあわせ」を探る具体的なアクションプランを学生と日野町職員が協力して考案し、「日野町ではたらくよろこびのための7か条」を作成した。





時間	内容	備考
10:00~10:30	ガイダンス	①地域づくりと公務員志望 ②地方創生人材育成の全体像のまとめ ③アイスブレイク ④事前アンケート調査の結果共有
10:30~12:30	日野町役場の紹介と現場見学	日野町役場の各課を訪問・見学
12:30~13:30	ランチセッション	日野町役場職員も交えての意見交換
13:30~14:20	日野町役場職員へのインタビュー	多様な世代の日野町職員に協力いただき、学生2人1組程度に分かれてのペアインタビュー
14:30~16:00	ブレインストーミングセッション	日野町での「はたらくよろこび」と「まちのしあわせ」を探る具体的なアクションプランを学生と日野町職員が協力して考案

(3) 参加学生の感想(一部抜粋)

●はたらくよろこびやウェルビーイングというのは、自分が誰かに貢献しているという気持ちだと考えた。今回町職員のひととの交流で、インタビューを行った際教えてもらった仕事内容や思いは、それらに通ずるものであった。自分は誰かに認めてもらえたり喜んでもらえたりした時にそれを感じる、と仰っ

ていた。町職員というのは、何かを変革するような大々的なプロジェクトを持つ職種ではないけれど、住民の人々の小さな喜びであったり、彼らが住んでいる街にずっと居たいと思えるような、そんな温かな気持ちを与える素晴らしい職業なんだと私は知った。それらを手に入れる為には、日々の勉強や地域住民への理解を深めるといった、地道な努力を積み重ねる必要がある。他の仕事も同様である。時には誰かの反感を買ったり、葛藤が芽生えたりするものであるけれど、それを踏まえてもその仕事を続けていきたいと思えるのが、はたらくよろこびやウェルビーイングに繋がるのだらうと考えた。

●今回日野町の町役場で働いていらっしゃる方と話し、仕事内容や仕事から得られるものなどを教えていただいた。話を聞いていると、ワークショップに参加して下さった町役場の方々は皆楽しそうにやりがいを持って働いていらっしゃると感じた。はたらくよろこびとして1番心に残っているのは、町民の方々の笑顔を見ることがモチベーションに繋がるということだ。私自身、バイトをしており、お客様の笑顔を見ることがありがとうございますと感謝の言葉を伝えていただくことがモチベーションに繋がっているとよく感じる。どの職種でも人のために働くというのは自分自身の幸せにも繋がるのだと学んだ。また職場環境のお話で、1人で抱え込まず、周りの人を巻き込むことが大切だと教えてもらった。私は1人で抱え込みがちなので、町役場の方のように、周りを頼り、働きやすい場にしていくと、はたらくよろこびを感じやすく、生き生きと働けるのだと学んだ。

●ただただ生きていく、生活していくためには程々の力で与えられた仕事をこなしていくだけで良いが、丁寧にかつ取り組む際に前向きであることで「はたらくよろこび」を得ることが出来ると感じた。やる気のない、なんとなくの状態でも働いても何も心が動かされず、仕事に嫌気がさしてくるといった話を聞くことが出来て良かった。実際学生の自分でも興味を持って人の話を聞いたり、文章を読まなければそれが嫌になってしまうので、その後に楽しみを用意して我慢しながら取り組むのではなく、少しでも内容に面白さを感じるように物事に取り組みたい。「ウェルビーイング」という言葉は今回のワークショップで初めて知った言葉だった。しかしながら、今回の日野町役場の皆さんとお話で最も適しているのは、仕事において充実している、私生活において満たされている状態のことではないかと思った。

2 事業紹介

2-1 事業一覧

2-1-1 地域課題の解決と地域共生等に関する教育および研究

1. 地域教育プログラム

(1) 地域教育プログラム(基礎)

地域教育プログラムは、地域での実践を通して現実に生起する諸問題に創造的に取り組み、変革する能力と態度を養うことを目的にしている。「基礎」では1年次の全学部学生約600人が学部の枠を超えてグループワークを通じ一緒に学ぶ「地域共生論」、選択科目の「地域コミュニケーション論」をはじめとする地域基礎科目で基礎的な能力を養う。

(2) 近江楽士(地域学)副専攻

地域教育プログラムの「展開」「応用」に位置付ける全学・全学科対象の未来志向の学びのプログラム。実社会に必要なノウハウを地域から学び、主体的に考え行動し、課題を解決するための学びを提供する。

コミュニティ・ネットワーク(CN)コースは、地域を客観的に分析し、人材や資源を結び合わせて地域再生に向けた取組をデザインするネットワーク力を身に付ける。

ソーシャル・アントレプレナー(SE)コースは、起業家的精神をもって起業や地元企業等でリーダーシップを発揮する起業力を身につける。

この副専攻を修了し所属学科の卒業要件を満たすことで「近江楽士(コミュニティ・ネットワーク)」、「近江楽士(ソーシャル・アントレプレナー)」の称号が付与される。

(3) 近江環人地域再生学座

本学の大学院生や社会人を対象に、地域再生のリーダーとなる資質を有した人材「近江環人(コミュニティ・アーキテクト)」を育成するもので、研究科横断による枠組みで地域再生や地域活性化のための必要な知識と技能を総合的・体系的に習得できる副専攻カリキュラム。なお、学座修了生を中心に結成された特定非営利活動法人コミュニティ・アーキテクトネットワーク(NPO 法人環人ネット)が、地域での活動連携や大学とのつなぎ役などで大きな役割を果たしている。

(4) 近江楽座

地域貢献を目的とする学生主体の地域活動を全学的に支援(活動助成・コンサルティング・情報発信と共有)する教育プログラム。平成16年度に文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」事業として実施し、平成19年度からは本学の独自予算で継続している。事業の目標としては、①地域の課題に学生・大学が取り組み、地域の活性化に向けて共に行動する②学生が地域の方々と一緒に行動することにより、学内だけでは学べないことを体験する③大学と地域が共同してよりよい地域づくり・人づくりにつながる仕組みをつくる、の3つがある。毎年20を超えるプロジェクトがまちづくり、健康福祉医療、環境保全、農業振興、被災地支援など様々な分野で、県内外、海外までもフィールドにして活動を続けている。



近江楽座 政所茶レン茶会 集められた手摘みの茶葉

2. SDGs 達成に向けての取組

世界共通の目標である SDGs に関しては「地域に根ざし地域に学び、地域に貢献する」大学として、SDGs の地域化拠点を目指して平成30年に滋賀県立大学 SDGs 宣言をした。持続可能な地域社会づくりに貢献する人づくりを目指す前記1に記載の様々な地域教育プログラムのほか、キャンパス SDGs びわ湖大会、SDGsに関連した映画を用いたソーシャルシネマダイアログ、ゲームを用いて学ぶ SDGs 連続講座、出前講座など地域の人材育成の事業などにも取り組んでいる。

3. 地域づくり等調査研究

本学の知的資源を生かし、自治体、NPO、経済団体等と連携し受託研究を実施している。

2-1-2 地域における人材育成等

前記 2-1-1 の 1「地域教育プログラム」における近江環人地域再生学座によるまちづくりの担い手育成の取組、前記 2-1-1 の 2「SDGs 達成に向けての取組」に記載の地域において SDGs の視点も持って活躍する人材育成のための連続講座、出前講座などの事業を実施している。

2-1-3 地域との連携および交流

1. 地域連携相談窓口の設置

平成 30 年度より地域共生センターに地域連携相談窓口を設けて、県や各市町、関係団体等からの大学との連携相談に一元的に対応し学内各学部との調整等に当たっている。

○地域連携窓口の連絡先

滋賀県立大学地域共生センター

TEL:0749-28-9851 FAX:0749-28-0220

e-mail:chiiki_koken@office.usp.ac.jp

2. 市町等との包括連携協定

「地域貢献」を取組の大きな柱とする本学として、県内各市町と地域の課題や特性等を踏まえた具体的な連携・協力関係や体制を明確にし、組織的な連携を推進するため包括連携協定の締結を進め、随時意見交換を行っている。また、関係団体とも連携協定を結び、取組を推進している。

2-1-4 生涯学習、リカレント教育

人生 100 年時代と言われ、地域住民の生涯学習や現役世代のリカレント教育など多様なニーズに対応することも学の使命である。公開講座や公開講義など、地域に貢献する本学として、社会情勢の動きや受講生の声を踏まえながら係教員の協力を得て本学の有する知的資源をもとにこれら生涯学習支援の取組の充実を図っている。また、現役世代を対象としたリカレント教育についても関係団体と連携し取組を進めている。

2-1-5 他大学等の連携

1. 環びわ湖大学・地域コンソーシアム

県内 14 大学と県、市町、関係団体で構成される環びわ湖

大学・地域コンソーシアムの大学地域連携事業に、本学学生の参加を呼び掛けながら取組を進めている。

2. びわ湖東北部地域連携協議会

びわ湖東北部地域の 5 大学、県、3 市、2 商工会議所の連携によって、SDGs を活用した豊かに働き生活できるびわ湖東北部地域の創出に向け各種事業に取り組んでいる。

2-2 地域教育プログラム

2-2-1 概要

これからの時代を生きる若い世代には、これまでの仕組みの延長線上に自らの能力を磨くだけでなく、変化する時代を生き抜き、世界共通の目標である SDGsの達成のためにも持続可能な社会の創造を担う能力と資質を養うことが求められている。本学では、この課題に応えるためこれまでの専門性を身につけ俯瞰的に物事を見る能力を養うことに加えて、「コミュニケーション力」「構想力」「実践力」の3つの力から養う【未来志向の変革力】を身につけた人材を育成するための地域教育プログラムを実施している。

このカリキュラムマップは次のとおりで、全学必修の地域共生論や地域基礎科目からなる【基礎】、近江楽土副専攻科目や学部学科での地域志向科目からなる【展開】、そして具体的な地域でのフィールドワークなどを主体とした地域デザイン A~D の【応用】で構成されている。



一年次学生必須「地域共生論」ホールでの授業風景

学習・教育目標	コース別	授業科目名															
		1年			2年			3年			4年						
		前期	地域活動 実践ターム①②	後期	前期	地域活動 実践ターム	後期	前期	地域活動 実践ターム	後期	前期	地域活動 実践ターム	後期				
卒業論文・制作											各学部各学科での卒業論文・卒業制作						
インターンシップ								中期 インターンシップ									
応用	近江楽土(地域学) 副専攻	コース共通						地域デザインA、B、C、D(※2)									
展開	地域志向 専門科目				地域志向専門科目 (各学部各学科の専門科目であり、副専攻要件には含まれません)												
	近江楽土 (地域学) 副専攻	ソーシャル アントレプレナー(SE)			ソーシャル・ ビジネス概論	MBA入門		ビジネス・ プランニング									
		コミュニティ ネットワーク(CN)			地域診断法	システム 思考法		問題解決 デザイン論									
基礎		地域基礎科目 (※副専攻必修)			ソーシャル・ビジネス 地域診断法②③												
	地域 基礎科目			地域コミュニ ケーション論													
			地域課題科目(群)														
			地域共生論														
学生主体の地域活動														近 江 楽 土			



地域共生論プレゼンポスター発表の様子



地域デザイン A フィールドワークの様子

2-2-2 関連科目の履修登録状況

地域教育プログラムの地域基礎科目、近江楽士（地域学）副専攻科目の開講科目および履修登録状況は次のとおり。

○地域教育プログラムの履修登録状況

科目名	履修登録者数	
	令和 4年度	令和 5年度
地域共生論	632	643
地域コミュニケーション論	69	148
地域社会福祉論	123	83
地域づくり人材論	123	155
びわこ環境行政論	87	128
多文化共生論	不開講	85
地域産業・企業から学ぶ社長講義	174	52
SDGsと滋賀のグローバルイノベーション～近江の暮らしとなりわい～	55	37
近江の美	178	不開講
世界遺産のまちづくり・人づくり	39	19
地域診断法	75	32
システム思考法	17	8
問題解決デザイン論	28	8
ソーシャル・ビジネス概論	26	21
MBA入門	13	9
ビジネス・プランニング	10	3
地域デザインA	16	11
地域デザインB	9	1
地域デザインC	10	5
地域デザインD	3	4

2-2-3 地域共生論

「地域共生論」は、各学部から提供されるテーマをもとに地域共生の意義を理解し自ら率先して地域における活動等を実践することの大切さを学ぶとともに、SDGsの視点も交えて考え、他者を理解し、共感と豊かな対話を可能とするコミュニケーション力向上を目指す1年次前期の全学生必修科目である。640名余の受講生を学部別のまたがるグループに編成し、ディスカッションやポスター作成、発表などのアクティブラーニングを実施するのが本授業の特徴となっている。

令和5年度も昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症の予防対策を実施し対面形式の授業を開講した。教室内の密を避けるため受講生を2教室に分けて、講義を担当する教員は別室からZoomを使って各教室へライブ配信をした。配信内容を録画することで欠席者へのオンデマンド受講にも対応できた。



教室をカメラで繋ぎ生徒の様子を見ながら授業を進める様子

2-2-4 地域基礎科目

○ 地域基礎科目（選択必修科目）

地域基礎科目は地域教育プログラムの基礎となる科目群で全学共通の科目であり、全学部生は前記 2-2-2 の必修科目「地域共生論」のほか、選択必修科目から1科目以上選択必修する必要がある。

科目	講義の主な内容
地域コミュニケーション論	産官学様々な立場や現場で活躍する地域人との対話や共同作業を通じて、地域社会で重要視されるコミュニケーションの基礎体力を養う
地域社会福祉論	少子高齢化や社会保障制度の行きづまり、孤独死や自殺の増加、子どもの貧困と格差社会などの現状を見つめどんな共通認識で何が必要かを考察する。
地域づくり人材論	地域の活性化を促す人材について、実際に各分野で活躍している人々を教室に招き、その存在や体験に触れながら学ぶ。
びわこ環境行政論	滋賀県の各分野の政策立案にかかわる行政担当者の講義を通じて、地域環境政策の課題を学び、琵琶湖という環境資産をもつ地域の持続可能な発展への政策とその実施について考える。
多文化共生論	教育や医療、行政などの各現場で多文化共生にとりくんでいる方をゲストスピーカーに招きながら、多文化共生の地域づくりにおける現状と課題について学び考える。
地域産業・企業から学ぶ社長講義	滋賀県の代表企業等のトップに産業界ニーズ、求める人材、学生に期待される能力などを語って頂き、滋賀県の産業・経済の特徴や抱える課題などを学ぶ。
SDGsと滋賀のグローバルイノベーション～近江の暮らしとなりわい～	近江のいとなみを事例に様々なゲストと議論し、SDGsの考え方に照らしローカルな実践・課題とグローバルなそれらとがどう関わり、その関りの中でどんな未来（グローバル・イノベーション）が実現できるのか導き出す。
近江の美	近江には豊かな自然とその恵みを活用した美術工芸が根付き、多くの職人が集い技を磨いてきた。こうした営みから編み出された「美」、作品を通じて湧き上がる「感性」がどう醸成されたかを振り返り、最前線の職人、企業家、編集者、デザイナーなどと教員との対談で美意識を深める。
世界遺産のまちづくり・人づくり （彦根商工会議所寄附講義）	全国各地の世界遺産と人と状況をゲストに報告頂きケースメソッドや彦根城の世界遺産登録に向けた産官民の取り組みに関するワークショップ、まちづくり事業の提案等に取り組む。
地域診断法 副専攻科目（CN 必修）	日々求められる判断を行う際の物事の見方を修得し物事をうわべだけでなく分解・再構築してその本質的な特徴を見出す手法を「地域」をテーマとした「地域診断法」「エコロジカルプランニング」という手法を通じて身につける。
ソーシャル・ビジネス概論 副専攻科目（SE 必修）	社会的な課題や地域課題の解決手法としてのソーシャル・ビジネス(SB)やコミュニティ・ビジネス(CB)の理念を先駆者から学び代表事例を学習する。さらに SB、CB を実践するための基礎的な知識や事例研究からそのノウハウを学ぶ。

地域基礎科目のうち「地域づくり人材論」では本学を卒業して各地で活躍する OB・OG や、県内を中心に様々な分野で活躍する「地域づくり人材」をゲスト講師として招き、地域とは何か、地域づくりとは何か、そして地域づくりをすすめる「人材」とは何か、といったことについて、ゲスト講師による具体的な事例や講師本人の姿や言動あるいはそれぞれの人生の軌跡を通して学ぶ。今年度の各回授業テーマは以下のとおりである。「人」と地域を考える」「地域に風穴をあける」「医療・福祉と地域づくり」「地域づくりと企業」「関係人口から移住・定住へ」「生活技術の継承と再生」「ローカルキャリアと地域づくり」「人口 4000 人のまちで仕掛ける」「地域の生存戦略」「地域をまたぐデュアルライフ（2拠点生活）からはじまるライフシフト」「人をつなぐ／人がつながる場としかけと地域づくり」「新しい時代のリーダーシップとは」「歴史的・文化的遺産と地域づくり」。また、同じく地域基礎科目の「地域コミュニケーション」では、多くの市民（地域

人）を招き、学生と社会人が一堂に会する場での対話を通じて、コミュニケーションの本質について学ぶとともに、様々なレベル様々なテーマでの対話を豊富に行うことによって「コミュニケーションの基礎体力」を養うことを目指す。コミュニケーションや対話を豊かにする「グラフィックレコーディング」の技法を身につける。なお、この講義には例年知事も参加し、受講者との対話を行っている。

以上の科目をはじめ、「キャンパスはびわ湖。テキストは人間」という本学のキャッチコピーを体現するような科目群によって受講生は専門に留まらない幅広い視野や、専門を生かして地域づくりの現場で活躍するための素地を身につける。また授業のなかで得た地域づくり人材や地域人との人脈を生かして、活躍の場を広げた受講生、あるいは、自身のキャリアの方向性が定まったというような受講生もあり、地域基礎科目は、地域に関する基礎的な知識の獲得に留まらない様々な学びとチャンスを提供するものとなっている。

2-2-5 地域志向科目

地域志向科目は、各学部学科の専門科目として提供されるもので、地域教育の一環として積極的に履修することを推奨している。

令和 5 年度は、環境科学部の「環境フィールドワークⅠ」など 8 科目、工学部の「材料科学実験Ⅱ」など 2 科目、人間文化学部の「環琵琶湖文化論実習」など 10 科目、人間看護学部の「人間看護学概論」など 4 科目が地域志向科目に位置付けられている。

2-2-6 近江楽士（地域学）副専攻

1. 人材育成イメージ、身につける力と科目構成

(1) コミュニティ・ネットワーク(CN)コース

CN コースでは、①地域を客観的に分析し、人や資源を結び合わせて地域再生に向けた取組をデザインする人材、②行政や NPO、市民活動等の分野でリーダーシップを発揮する人材の育成を目指し、地域を題材に具体的に地域課題を解決できるノウハウを学んでいる。

○ CN コースの科目構成

科目	備考
地域診断法	必修
システム思考法	
問題解決デザイン論	
地域デザインA～D	選択必修 (A,B の受講を推奨)

(2) ソーシャル・アントレプレナー(SE) コース

SE コースでは、①ソーシャル・ビジネスの発想と手法によって地域課題を解決に導く起業家的人材、②起業家精神をもって地元企業等でリーダーシップを発揮する人材の育成を目指している。

令和3年度から、起業家精神をもった人材を育成すべく科目構成を見直した。創業・起業事例をもとに地域課題解決手法を学ぶ「ソーシャル・ビジネス概論」、ビジネスゲームを通じ経営、経済の基本、企業の社会的価値を学ぶ「MBA 入

門」、事業計画の作成を学ぶ「ビジネス・プランニング」、ビジネスプランの地域社会等での実践「地域デザイン C,D」で新たに構成している。

科目	備考
ソーシャル・ビジネス概論	必修
MBA入門	
ビジネス・プランニング	
地域デザインA～D	選択必修 (C,D の受講を推奨)

○ SE コースの科目構成

2. 近江楽士の称号授与者

近江楽士（地域学）副専攻の各コースの所定の単位を修得し、所属する学科の修了要件を満たすとその修了が認められ、近江楽士の称号が授与される。

近江楽士コミュニティ・ネットワーク(CN)称号授与者は平成 26 年度から、ソーシャル・アントレプレナー(SE)称号授与者は平成 30 年度から輩出している。

SE コース称号授与者の就職先は、大学院進学者を除いて、その多くが滋賀県内となっており、地元定着につながっている。

○ 近江楽士称号授与者数の推移

称号	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
CN	10	3	23	16	6	21	17	15
SE	—	—	3	5	1	4	4	5
合計	10	3	26	21	7	25	21	20
実人数	10	3	23	17	7	21	20	18

特徴的な講義内容等

(1) 「ソーシャル・ビジネス概論」

ソーシャル・アントレプレナーコースの一番基礎的な科目である「ソーシャル・ビジネス概論」では社会的な課題や地域課題の解決手法としてのソーシャル・ビジネスやコミュニティ・ビジネスについて先駆者からその理念や代表事例を学び、またそれらを実践するための基礎的な知識や県内の事例研究からノウハウを習得する。

具体的には①先駆者からの理念等の学びに関してはムハマド・ユヌス「貧困のない世界を創る」、洲上清二「近江商人ものしり帖」、渋沢栄一「論語と算盤」、細内信孝「コミュニティ・ビジネス」を活用し、②代表事例として、「葉っぱビジ

ネス」、「マザーハウス」、「ボーダーレスジャパン」の取組をグループでの議論も交えて学んだ。また、ビジネスによる地域課題解決の手法やビジネス計画、資金計画、ソーシャルインパクトのノウハウ、県内において琵琶湖の環境保全の取組を漁師の湖魚を活用したビジネス、農福連携など福祉分野でのビジネスなどの事例を学び、グループワークでソーシャル・ビジネスを設計した。

(2) 実践現場での学び

近江楽士（地域学）副専攻の座学では、両コースとも地域課題に関するグループワークを中心に行い、地域デザインA～Dの講義では現場に足を運んで地域の方々の協力を得ながら実践的な学びを修得した。

○ 令和5年度の主な実践現場等

科目名	学びのフィールド等
地域デザインA	・多賀町大滝 ・彦根市銀座商店街 ・長浜市びわ地域
地域デザインB	日野町職員とのワークショップを通じて、日野のまちで働くことの意義や課題を学ぶ
地域デザインC	彦根市石寺町における居場所づくり コミュニティカフェの企画、運営
地域デザインD	新たに事業を起こす場合に必要となるビジネス・プランニング（事業計画）について、企業の経営者のアドバイスも受けながら学ぶ。



地域デザインA 彦根市銀座商店街でのフィールドワークの様子

2-2-7 近江環地域再生学座

近江環地域再生学座は、湖国近江をフィールドに地域診断からまちづくり活動の実践まで、地域における多様な活動や挑戦のための知識・手法の教授を通じて、地域資源を活用した地域課題の解決や地域イノベーションを興し地域社会を切り拓くイノベーターやコーディネーターの育成を目指すプログラムである。

プログラムを修了し、検定試験に合格することで受講者には称号「近江環人（コミュニティ・アーキテクト）」が授与される。自治体職員、民間企業、NPO や自治会に所属する方、建築や都市計画の専門家など様々な所属・専門の人材が受講し、令和5年度末までに161名（うち大学院コース79名、社会人コース82名）が称号を獲得した。

令和5年度の称号授与者は大学院コース2名、社会人コース7名の計9名である。授業は対面、オンライン、オンデマンド方式を併用して行った。

受講生アンケート結果では大変満足、満足とし、感想として次のような声があった。

【良かった点】

○特によかった点は、普段接することのない社会人の方や院生の方と交流することができたこと。

○多岐にわたる講義のテーマ、そして全国各地の実践者にお会いできる授業はとても刺激的だった。また毎回のレポートには苦戦したが、授業で聞いた内容を振り返り自分の考えを文章にまとめてアウトプットするトレーニングになった。

○普段、業務において学ぶことが出来ない知識を取得でき良かったです。

○全国から様々な分野で活躍されている講師の方々の講義を聞いたこと。

【残念だった点・改善してほしい点】

○レポートに書いた内容の共有など、受講生同士の対話の時間がもっと欲しいです。



「実践現場体感特別講義Ⅱ」 岡山西栗倉

2-2-8 近江楽座

近江楽座の取組は平成16年度に始まり令和5年度までの20年間で生まれたプロジェクトは延べ448件である。扱うテーマはまちづくりを始め、健康医療福祉、環境保全、農業振興、伝統文化の継承、被災地支援と広範で、活動地域も県内のみならず、県外や海外にまで及んでいる。本年度は、下記の21チームが近江楽座に採択された。

○ 令和5年度の採択プロジェクト一覧

プロジェクト名	活動エリア	関連団体
政所茶レン茶“ー	東近江市政所町	政所茶縁の会、政所茶生産振興会
BAMBOO HOUSE PROJECT	湖南市菩提寺	菩提寺まちづくり協議会
男鬼里山再生プロジェクト	彦根市男鬼集落	おおりびと
廃棄物バスターズ	彦根市、県内	社会福祉法人いしづみ会 他
とよさと快蔵プロジェクト	豊郷町	NPO 法人とよさとまちづくり委員会
未来看護塾	彦根市	彦根市立病院、特定非営利活動法人 NPO ぽぽハウス 他
あかりんちゅ	彦根市、県内他	滋賀教区浄土宗青年会
かみおかべ古民家活用計画	彦根市上岡部町	上岡部町自治会、滋賀県愛瓢会他
ヴォーリス研究会	近江八幡市	学校法人ヴォーリス学園
フラワーエネルギー「なの・わり」	彦根市	菜の花プロジェクトネットワーク
内湖の再生と地域の水辺コーディネート	彦根市他	彦根市生活環境課
沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト	近江八幡市沖島町	沖島ファンクラブ「もんで」
三津屋町地域活性化プロジェクト	彦根市三津屋町	三津屋町自治会
地域博物館プロジェクト	彦根市・高島市・近江八幡市	白谷荘歴史民俗博物館他
犬上川竹林整備プロジェクト	彦根市	犬上川開出今地区竹林愛護会、彦根市、滋賀県
座・沖島	近江八幡市沖島町	沖島町離島振興推進協議会
おとくらプロジェクト	彦根市高宮町	高宮連合自治会
障がい児・者、自立支援共生社会プロジェクト	彦根市他	NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー
日夏里かがやけプロジェクト	彦根市日夏町	日夏里館運営団体
はっしん歴史遺産@近江	長浜市余呉町 菅並地区他	湖北古民家再生ネットワーク
Cebu Parian Project	フィリピン セブ市	NPO 法人 Foot Roots、HO-TONG FOUNDATION、

1 令和5年度実施事業について

3年間猛威を振るった新型コロナ感染症も沈静化し、5月には5類感染症に移行したことで、私たちの社会生活は大きく変化しました。近江楽座の各プロジェクトの活動もこれまで制約を受けてきましたが、地域行事が再開される等コロナ前に徐々に戻ることで、学生たちの活躍の場も広がっていききました。

○ 令和5年度の事業実施日程

(下記、「日程」欄に(1)～(6)の数字が付された行事は「2 主なトピックス」にて詳述)

日程	行事
4月17、18、19日	プロジェクト合同説明会
4月24、27、28日	2022年度活動成果報告会開催
4月17日～5月15日	プロジェクト募集
5月27日	令和5年度プレゼンテーション・審査会
6月1日、5日	審査結果発表＜21 プロジェクト採択＞、活動説明会・プロジェクト活動開始
6月14日	継続審議案件（1件）の採択決定（補足説明依頼、審査会（書面開催））
7月11日	スキルアップ講座「危機対応講習」開催
7月10日 (1)	滋賀県建設コンサルタント協会 NPO 活動支援事業 助成金交付式
7月13日	第1回代表者会議
9月4～6日 (2)	全国公立大学学生大会（LINKtopos2023in 沖縄）廃棄物バスターズ参加
10月27日	第2回代表者会議
12月3日	開出今団地でのイベント開催（キャンドル製作体験&お茶の淹れ方講座）
12月12、13、15日	中間報告会開催「地域での経験を語り合う」
12月18～22日 (3)	チャレンジショップ（政所茶レン茶 [®] 一、リソース（22日のみ））
12月20日	第3回代表者会議
12月21日～1月11日 (4)	近江楽座20周年 写真展「記憶・語り・つながり」
2月10日 (5)	「あかりんちゅ」第13回毎日地球未来賞 奨励賞受賞 受賞記念報告会
2月14日 (6)	「BAMBOO HOUSE PROJECT」学生ボランティア団体活動レポート優秀賞 表彰式
3月4～6、11、13日	助成金最終ヒアリング
3月15日	活動実績報告提出

2 主なトピックス

(1)「一般社団法人滋賀県建設コンサルタント協会」の支援事業に近江楽座の3チームが選出される

本支援事業は、一般社団法人滋賀県建設コンサルタント協会が主催し、道路・河川・都市計画等に関する研究・提言、またはまちづくりに関する啓発を目的に活動するNPO 団体や大学・専門学校等に対する支援を行うことにより、社会資本の整備に貢献をしようとするものです。本学の4団体が活動支援事業に選ばれ、そのうち、近江楽座からは「かみおかべ古民家活用計画」、「BAMBOO HOUSE PROJECT」、「男鬼里山再生プロジェクト」の3チームが選出されました。



本学理事長室にて行われた助成金交付式

(2)令和5年度全国公立大学学生大会にて「廃棄物バスターズ」が活動を報告

同大会は地域活動を行っている公立大学の学生が年に一度全国から集まり、ワークショップ等を通して交流を図るイベントです。今年は9月4日から6日までの3日間、沖縄県立芸術大学と沖縄県立看護大学にて開催されました。本学からは近江楽座の「廃棄物バスターズ」が参加し、『ポスター発表』や那覇市街地の清掃を行いました。ポスター発表を見た他大学の先生からは「今後の社会を見据え素晴らしい活動」等評価いただきました。



ポスター発表の様子

(2) チャレンジショップを開催

2023年12月コロナ禍により開催を自粛していた「近江楽座チャレンジショップ」を4年振りに学生ホールにて開催しました。「政所茶レン茶ー」と「リソース」の2チームが出店し、学生や教職員に自分たちが育てたこだわりの農産物を販売したり、お茶の試飲をするなどPRを行いました。

政所茶レン茶ーは、政所茶を知ってもらうことに重点を置き試飲を呼びかけました。気に入っていただいた方からはお土産用に購入いただきました。

リソースは、日夏町で学生が手作りする無農薬野菜であることをアピールし、2日間で用意した大根約50本はほぼ完売となりました。



お茶の販売・試飲
(政所茶レン茶ー)



野菜販売(リソース)

(4)近江楽座20周年 写真展「記憶・語り・つながり」を開催

これまでのプロジェクトの活動を振り返る、「近江楽座20周年 写真展『記憶・語り・つながり』」を学内交流センターホワイエにて、12月21日から翌年1月11日まで開催しました。展示は学生・教職員と地域の方々との20年間の活動の厚みが詰まった内容で、写真を通して記憶や体験を語り合い次の活動に繋げてもらえたらとの願いを込めました。



滋賀県立大学ホワイエにて展示

(5)「あかりんちゅ」が『第13回毎日地球未来賞』の奨励賞を受賞

この賞は未来の子どもたちに良好な環境を残すため「食料」「水」「環境」の分野で問題解決・改善に尽力する市民団体や個人・学生の活動を顕彰するものです。

「あかりんちゅ」は、寺院から寄付された使用済みのロウソクを利用してリサイクルキャンドルを製作しています。そのつくり方を学ぶ教室を開いたり、再生キャンドルを使ったキャンドルナイトを実施して地域おこしに協力しました。資源の有効活用や地域への貢献等が評価されました。



受賞記念活動報告会での発表の様子

(6)「BAMBOO HOUSE PROJECT」が「学生ボランティア団体活動助成活動レポート」の優秀レポートに選出される

「BAMBOO HOUSE PROJECT」は、湖南市をフィールドに手入れの行き届かない竹林を整備し、竹を利用した遊具や構造物の製作をしています。

一般財団法人学生サポートセンター主催のレポートに応募したところ、環境保全への貢献や地域のコミュニティを支える取り組みが評価され、今回の受賞となりました。

表彰式では、受賞者を代表して箱田里菜さんがこれまでのプロジェクトの取組みを発表しました。



放置竹林を整備して遊具を建築

3 その他のトピックス

(1)「未来看護塾」の提案が『令和 5 年度「健康しが」活動創出支援事業』に採択されました

滋賀県では、健康寿命のさらなる延伸に向けて、「健康なまちづくり」を企業や大学、地域団体、自治体等の多様な主体で構成する「健康しが」共創会議を設けています。同会議が、令和 5 年度の県民の健康づくりに資する取組を募集したところ、「未来看護塾」の提案した「地域に住む高齢者が心身ともに健康に過ごせる地域づくり」が採択されました。



自治会館でハンドマッサージを行う学生

(2)「とよさと快蔵プロジェクト」が電通育英会助成事業に選ばれました(2 年連続)

電通育英会は、株式会社 電通により設立された奨学財団です。本助成事業は、NPO 法人や大学内組織など非営利団体が行う次世代リーダーを育成する活動に対して、年間 10 件程度、助成を行っています。

「とよさと快蔵プロジェクト」は、豊郷町内に点在する空き家となった民家や蔵を、学生の視点で活用し、地域を盛り上げる活動を行っています。今年 20 周年を迎え、この間ただ改修だけでなく、改修物件のその後を考えることで、まちの人の交流や空き家の活用を学ぶ機会を増やしてきました。



プロジェクト発足 20 周年イベントの様子

(3)「ヴォーリス研究会」が設計図面からヴォーリス建築の思想を読み解く企画展を開催

令和 6 年 2 月、「ヴォーリス研究会」が近江八幡市の団体等とコラボして企画展示を行いました。これまで公開されることが少なかったヴォーリス建築の設計図面をスクリーンに投影するなど、ヴォーリスの思想がわかりやすく伝わるよう工夫をしました。



ヴォーリスの建築図面を見つめる来場者

2-3 SDGs地域化拠点の取組



滋賀県立大学

×

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

滋賀県立大学SDGs宣言

S 滋賀県立大学は「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」をモットーに

D 誰一人取り残さない持続可能な社会を目指し

G グローカルな思考と実践をもって

s 世界と地域の発展に貢献します



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

2030年に向けて世界が共通した「持続可能な開発目標」です

2-3-1 SDGsに関する取組の全体像

本学では、平成30年6月に「滋賀県立大学SDGs宣言」を行った。大学のSDGsへの取組みとしては2つの方向性から考えることができる。一つは、世界共通の持続可能な開発目標であるSDGsをこの滋賀の地に適合させ、根付かせること。そしてもう一つが、既に近江商人の三方よしの精神に

基づき、長年に亘り、実践され、蓄積されてきた暮らしとなりわいにおける様々な地域の叡智を世界に発信し、SDGsに統合しようとするものである。この双方向的な“SDGsの地域化”こそが、大学が果たすべき役割であると考え、取組みを進めている。



2-3-2 キャンパス SDGs びわ湖大会 2023



- 1 開催日 令和5年11月18日(土)～23日(木・祝)
- 2 開催形式 対面開催(一部オンライン開催)
- 3 のべ参加者数:約170名
- 4 プログラムの内容

◎11/18「海外での取り組み報告」参加者6名

本学から米国に留学している学生とオンラインミーティングで繋ぎ、現地で取り組まれているSGDsに関する取り組みを紹介し、日本と異なる部分を学んだり、日本でも適用できることを見つけたりする目的で本報告会を開催した。留学先のコロンビアカレッジ(ミズーリ州)の教員からも SDGs 達成に向けた活動の状況を報告いただいた。

▶馬場そらさん(本学からの留学生)の報告

コロンビアカレッジで見つけた SDGs に向けた取り組みについて報告があった。使い捨て容器削減のためウォーターサーバーが学内に多数設置され、効果が可視化されるよう給水回数が表示されることや、教科書のリユースを促進し、学生の経済的負担を軽減する教科書レンタルの仕組みなどが紹介された。

▶コロンビアカレッジ教員 Dr. Digernes/Dr. Miller/Mr. Pittman

廃線となった線路跡を活用した自転車用のトレイルコースやファーマーズマーケット、貧困や飢餓の問題への対策、ジェ

ンダー平等への取り組み、ヘルスケアに関するサポートなどについて紹介があった。人種差別の経緯や法規制など日本とも状況が違い、理解が難しいと感じる部分もあった。

[実行委員の感想]

・アメリカの SDGs の取り組みを学ぶことができたのはもちろん、教科書レンタルやジェンダー平等など日本でも適応できそうなアイデアをいくつか見つけることができた。また、環境問題に関するアメリカの課題についても知ることができた。
・留学に行っている馬場さんを通じて、コロンビアカレッジの3人の教授の方に海外の SDGs に関する取り組みや歴史について話を伺った。その中では、私の知らない海外の SDGs に関する取り組みや歴史があり、より SDGs について理解が深まった。また、それだけでなく海外の方と話す際の貴重な体験ともなった。



コロンビアカレッジとのオンラインミーティングの様子

◎11/18「SDGs Action 報告会」参加者30名

学内外の SDGs 関連の活動団体から報告を募り、その内容をオンライン発信サイト「note」に記事を掲載した(https://note.com/campus_sdgs_usp)。うち6団体からは、SDGs 達成に向けた活動紹介を対面会場で発表いただいた。



会場でのプレゼンテーション

SDGs Action 口頭発表者リスト

発表順	団体名	プロジェクト名	活動内容	関連するSDGs番号
1	海をつくる会 名古屋支部	琵琶湖湖底再生プロジェクト	琵琶湖の湖底と水辺の清掃、湖底ゴミデーターの採取と調査への提供。	14、17
2	ヴォーリス研究会	ヴォーリス研究会	W.M. ヴォーリスの現存する建築の調査・研究とそれらの活用方法を提案。	3、4、11、13、17
3	MINO CRAFT (みのかわくらふと)	MINO CRAFT (みのかわくらふと)	東近江市箕川町で空き家や景観の整備・保全活動を通じ、豊かな地域資源を守り、未来に残す取組み。	11、12、15
4	おとくらプロジェクト	おとくらプロジェクト	彦根市高宮におけるギャラリー喫茶営業を中心とした地域活性化への取組み。	11、12
5	滋賀県立大学 地域共生センター	県大 TAKI BI TALK	多様な人が集い、語り合える場をつくるために、焚き火の会を創始。	10、11、17
6	NPO法人 FootRoots	プラスチック・リサイクル・デザインプロジェクト	プラスチックごみ問題解決に向け、県内およびフィリピン・セブを拠点に、小規模リサイクルの取組み。	1、4、14、17
全体での質疑応答・感想共有（その後、自由に交流）				

〔実行委員の感想〕

それぞれの活動団体が、様々なフィールドで多様な活動に取り組まれている様子が紹介され、刺激を受けた。本報告会では個々の活動紹介に留まらず、報告者間の交流により新たな取組みへのヒントを得たり、イノベーションにつながる出会いの機会となったりすることを期待していたが、コミュニケーションが進まず、全体的に一方通行の報告となったことについては改善の余地があると思った。

◎11/18「創造的な学びのためのワークショップ」参加者12名

創造的な学びのコツについて記されたパターン・ランゲージカードを使用して、社会人と学生がそれぞれの学びの体験や思いを語る機会を作った。経験知の多い社会人からの体験談や現役学生が語る学びについての率直な実感は、相互に刺激し合い、多くの気づきが得られた。

〔実行委員の感想〕

学生と大人がまざりあい参加者同士がお互いに学び合う関係性が生まれ、「学び」をより良くするヒントを得ることができたのではないかと感じた。参加した方からも以下のような感想が寄せられた。

〔参加者からの感想コメント〕

- ・学ぶ方法は1つだけじゃなくて、人に伝えたい、学びたいことほど様々な学び方を実践する必要があるということを実感しました。
- ・学びのメカニズムとでもいうのか、こんな簡単なことが学びになるのかと思うと不思議ですね。
- ・様々なバックボーンや価値観をお持ちの方々とお話ができ、新たな価値観が得られたような気がします。特段の目的なく、ツール（今回はカード）を用いて、会話をするという機会は意外に少ないと思うので、良い取組だと思いました。今後は一層、成果や目的、能力を求められる世の中になると思いますが、これらを求めない機会をつくることは意義のあることだと私は思います。



◎11/20「銀座チェアリングカフェ」参加者約25名

彦根銀座街のアーケード下に椅子を置いて座り、いつもと違う目線からまちについて見直し、対話する場をつくった。普段話すきっかけのない人と出会い、話す機会が得られた。商店街の方や本学および滋賀大学の学生、海外からの留学生、その他地域の人も参加して、良い雰囲気が生まれた。イベントの途中には空き物件の見学会も実施し、実際にゲストハウスやシェアハウスとしての活用を考えている学生の話も聞くなど、これからの商店街の再活用についても具体的に話すことができた。大学が主体となり地域を学びの場とする（アウトリーチ型公開講座）試みとして、今後の発展につながる企画となった。

〔実行委員の感想〕

商店街の方と持続可能なまちづくりなどについて話し合った。商店街の現状や今後の方向性、彦根城の世界遺産登録への取り組み、あびす講について地元の人しか知らない貴重な話を聞かせてもらった。普段あまり関わりのない地域の方と彦根銀座商店街について話し合い、知ることができて、地域のために自分たちには何ができるのか再度深く考えたと思った。



チェアリングの様子

◎11/22「県大 TAKIBI TALK」参加者約 50 名

県大・滋賀大・バイオ大の学生、海外からの留学生なども参加し、多様な参加者による交流の場をつくった。普段は出会わない人たちの間に接点ができ、交流が広がった。今回、キャンパス SDGs 中の企画として実施し、規模が大きくなったことで、イベント感が増し、逆に小さな対話や交流が薄れてしまった点については改善が必要かと思われた。今後も定期的に学内での開催を継続し、小さな集まりがどんどん入れ替わりながら多様な関係性ができる場を目指したい。



焚き火を囲んでの対話

〔実行委員の感想〕

焚き火が行われることを事前に知っていた学生だけでなく、たまたま通りかかった学生も多く参加した。火光が映える中、誰もが気軽に自分の思いを語り合った。学生生活の喜びと悩み、将来の夢と希望などについて話し、教室ではあまりない、違う側面の仲間と思い出を共有する良い機会となった。このイベントで学生達は新たな仲間想いの絆を深めることができたと思う。県大 TAKIBI TALK は学生の心と心のコミュニケーションを育む貴重な時間だったのだと実感した。

◎11/22「ジェンダーについて考えるボードゲーム体験会」参加者約 20 名

地域文化学科横田ゼミ生により考案されたボードゲーム「ジェゴろく」体験を実施した。ゲームの体裁をとっているが、作成した学生からの話では、ジェンダーに関する対話のきっかけになればと考えたコミュニケーションツールであるとのこと。長浜バイオ大学のボードゲームサークルの学生が参加し、改良のアイデアをもらいながら実施した。

〔運営した横田ゼミ生の感想〕

バイオ大学の皆さんは聞く姿勢を示していただき、とても話しやすく感じた。バイオ大学ではチューター制度を導入しており、今回参加した学生は日常的に下級生の相談にのることが多いとのことだったので、その経験が雰囲気づくりに良い影響を与えているのだと思った。

年長者の参加者で自分の経験や意見を強めに主張される方もいたが、いろいろ話を聞く中で、そのような行動をとられる背景が見えたよう感じた。属性の違う人が、一緒にジェンダーのような社会課題について語る意味もあるような気がした。



創作ボードゲーム体験の様子

◎11/23「SDGs 映画上映会」参加者 15 名

映画「ナディアの誓い-On her shoulders」を上映し、鑑賞後に参加者同士が交流する時間を設けた。上映会の運営は、聖泉大学や長浜バイオ大学の学生が企画し、ジェンダー平等社会の実現に向けて活動している「市民団体くれよん」との共催で行った。祝日の午前中ということもあり、参加者は少なかったが、上映後の感想共有や意見交換の場では活発な対話が交わされていた。海外の遠く離れた場所で起こっていることを自分ごととして捉え、考え、行動を起こすことは一人では難しい。しかし今回のように、いろいろな視点や立場の人が関わり、協働することで小さな一歩を生み出すことができそうだと感じた。

〔実行委員の感想〕

取り扱った映画は完全にノンフィクションであり、(試写で)初めて視聴した際、日本で暮らしている自分にとって想像を絶する惨状が世界で起こっていることを知るとともに、先行き

の見えず、不安定な世界情勢に対する自身の無力さを感じずにはいられなかった。

上映会当日、実際に交流を始めてみると、男女を問わず参加された方の全員が意見や感想を共有することができた。(試写会では)なにも言葉にできなかった私自身も、触発される形で意見をまとめ、進行役に努める一方、中には映画の英語タイトルに着目して意見を述べられている方もおられ、予想を超えて実りのある時間になった。

全体を通して振り返ると、一人ではなく他者と交流することで、新しい視点や考えに触れ、それによって自身の言葉にならない「感じた事」を言語化できることや、新たな「気づき」を得られることを学べた。



上映後の感想共有の時間

2-3-3 教育、研究、地域への波及

1 SDGs 連続講座

今年度は、「カードゲームから始めるSDGsと脱炭素社会のための連続講座」として、ゲームを通してSDGsを考え、語り合う講座を開催した。昨年度に続き、有限会社ガイアコミュニティ代表取締役社長の風かおる氏を講師に迎え、各種カードゲームを体験することで、SDGsや脱炭素といった大きな課題に対し、私たちがこれからどのように行動していくのかを考える機会が得られた。各回の実施内容は以下の通り。

【各回の内容】

◎第1回「2030SDGsカードゲーム」

2023年11月23日開催。参加者8人。カードゲーム「2030SDGs」を通して、SDGsについて考えた。少人数での開催であった分、コミュニケーションを密にして意思疎通ができたため、ゲームの成績も良かった。

◎第2回「脱炭素まちづくりカレヅジ」

2023年12月9日開催。参加者6人。インフルエンザ等により、数名の参加予定者が欠席となったためゲームを実施できるだけの人数が集まらず、急遽参加者での対話の会に内容を変更した。それぞれが日常生活の中で脱炭素などの

課題をどのように考えているかを話し合い、米原市内の実践現場の見学などを行った。

◎第3回「2050カーボンニュートラル」

2023年1月13日開催。参加者13人。近江環人地域再生学座のスクーリング授業と併せて開催した。カーボンニュートラルの概念やその達成に向けての行動変容の必要性などを学んだ。



SDGs 連続講座のチラシ



カードゲーム体験の様子

2 SDGs 出前講座

県内外の行政や教育機関、企業等からの要望を受けて講演等を実施した。

SDGs 出前講座等の出講先

	時期	出講先・講演内容
1	2023.4.27、 4.28	桜花学園高等学校 滋賀で考えるSDGs ～2030年を自分 たちの手でどんな社会にするか？
2	2023.12.18	滋賀県立玉川高等学校 探究フィードバックガイダンス (SDGsに関する探究へのアドバイス)



SDGs 出前講座受講の様子

2-4 学生への食糧支援の取組

2-4-1 概要

物価高が続く中、滋賀県立大学での勉強や研究、課題活動などの学生生活が少しでも充実したものとなるよう、引き続き地域の皆様の協力を頂きながら、次のとおり食糧支援を実施した。

また、規格外野菜や消費期限間近の食品の学生への配布は、SDGs 達成に向けそのターゲットの一つである食品ロス削減につながり学生にもその趣旨を伝えた。



2-4-2 支援の経過

(1) 第1回目

日時: 令和5年5月18日(水)

配布食糧: お米(精米済)250袋(1人1kg)レトルト食品
250セット(1セット2個)

配布学生: 250人

提供団体: 近江日野交流ネットワークの日野町の農家さん
滋賀県立大学後援会

特記事項: 日野町の農家の皆さんが県大生のためにと提供
頂いた米と滋賀県立大学後援会から提供頂
いたレトルト食品を配布した。

(2) 第2回目

日時: 令和5年7月12日(水)

配布食糧: お米250袋(1人1.2kg)、野菜(ジャガイモ47k
g、玉ねぎ10kg、きゅうり10kg、その他ズッキー
ニや人参等)、ポケットティッシュ(1人1個)

配布学生: 250人

提供団体: 近江日野交流ネットワーク

特記事項: 日野町の農家の皆さんが県大生のためにと栽培
頂いた野菜を直接学生に対して、激励とともに手
渡していただいた。



(3) 第3回目

日時: 令和5年12月6日(水)

配布食料: お米(精米済)230袋(1人1kg)冬野菜など
(大根、ジャガイモ、柿、日野菜、サツマイモ、里芋
ほか多数)

配布学生: 230人

提供団体: 近江日野交流ネットワーク

特記事項: 日野町の農家の皆さんが県大生のためにと栽培
頂いた野菜を直接学生に対して、激励とともに手
渡していただいた。



(4) 第4回目

日時:令和6年1月23日(水)

配布食糧:お米200個、人参300本、赤いお米パン160個

野菜、食品、JA東びわこ女性部提供お米152袋

配布学生:250人

提供団体:JA東びわこの多賀にんじんクラブ・多賀町蔬菜

園芸組合・女性部の皆さん

特記事項:上記団体の皆さんが県大生のためにと、収穫された地域特産の多賀にんじんをはじめとした野菜やお米、食糧品などを直接学生に声を掛け手渡しいただいた。



3 日野町での野菜収穫体験と農家の皆さんとの交流

一般社団法人近江日野交流ネットワークの皆様が、学生たちを応援しようと日野町でのジャガイモや冬野菜などの農作物の収穫体験と農家さんとの交流事業を令和5年8月8日および12月2日に実施いただき、学生および教職員が参加した。

4 今後の取組予定

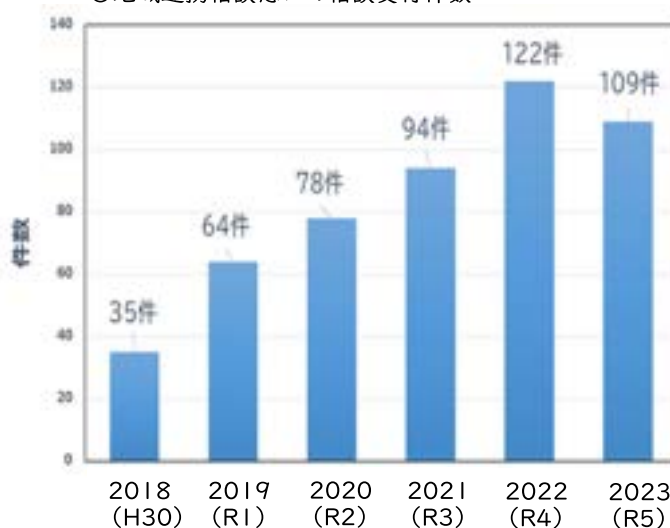
今後も地域のご支援をいただきながら学生を支援し、本学としても地域に貢献する大学として地域と密接に連携し課題解決に取り組む。あわせて、SDGs のターゲットの一つである食品ロス削減にもつながる規格外野菜等の学生への提供も農家さんの協力を得ながら継続する。

2-5 地域連携

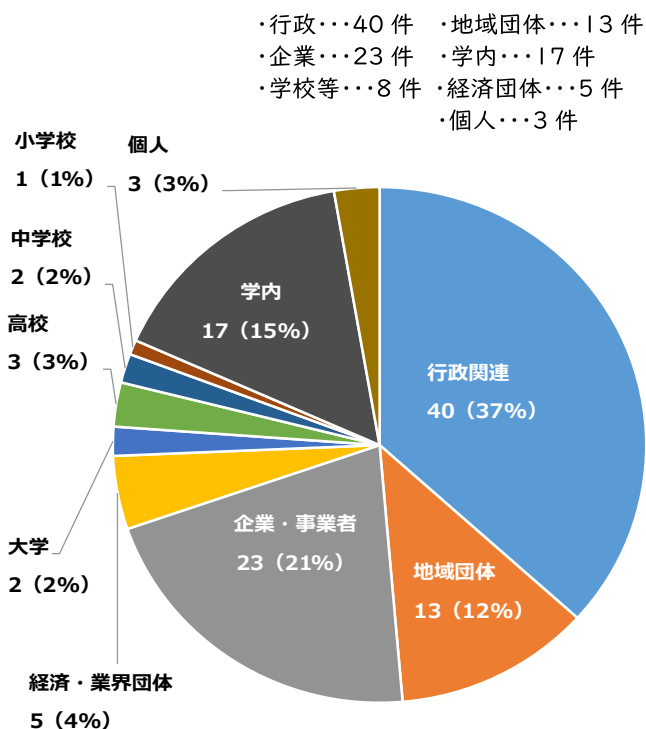
2-5-1 滋賀県立大学地域連相談窓口の相談対応

地域と本学をつなぎ SDGs の達成に向けた取組をはじめとする本学のシーズを生かした地域貢献を推進するため、地域共生センターに地域連携相談窓口の設置を設置し、地域連携コーディネーターを配置している。これまでの相談対応件数は次のとおり。

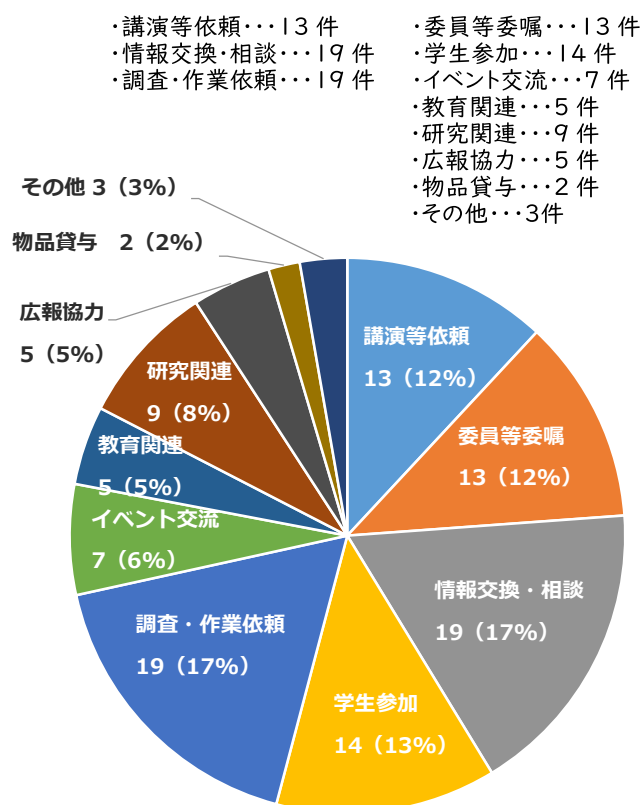
○地域連携相談窓口の相談受付件数



○令和5年度の相談者分野別件数



○令和 5 年度相談依頼内容



学生団体による環境学習体験の受入れ

○地域連携窓口の連絡先

滋賀県立大学地域共生センター

TEL:0749-28-9851 / FAX:0749-28-0220

e-mail: chiiki_koken@office.usp.ac.jp

(2) 地域活動を紹介する展示会「つくる未来展」開催

びわ湖東北部地域連携協議会の活動の一環として開催された米原市・彦根市・長浜市を活動エリアとしている市民団体を紹介するパネル展の企画運営に協力しました。

○ 連携の事例

(1) 中学校の修学旅行での環境学習対応

5 月 14 日(日)に修学旅行で滋賀を訪れた西東京市立田無第四中学校 2 年生の環境学習体験プログラムの受入れを行いました。

滋賀県立大学の会場では、近江楽座チーム「あかりんちゅ」と「廃棄物バスターズ」が 40 名の中学生に活動の紹介を行いました。その後は小グループに分かれて、お寺から出る残ろうそくをリサイクルしてのブロックキャンドル作製や琵琶湖岸の砂の中からマイクロプラスチックを見つけるワークショップを行いました。

湖南市菩提寺会場には 20 名の中学生が参加し、「バンブー・ハウス・プロジェクト」と菩提寺地域の方の案内で、整備されている竹林の現場に入り、竹でつくった遊具や施設などを見学しました。体験では竹と紐を使って様々な構造物を組み立てるための基本的な技術の体験をしてもらいました。



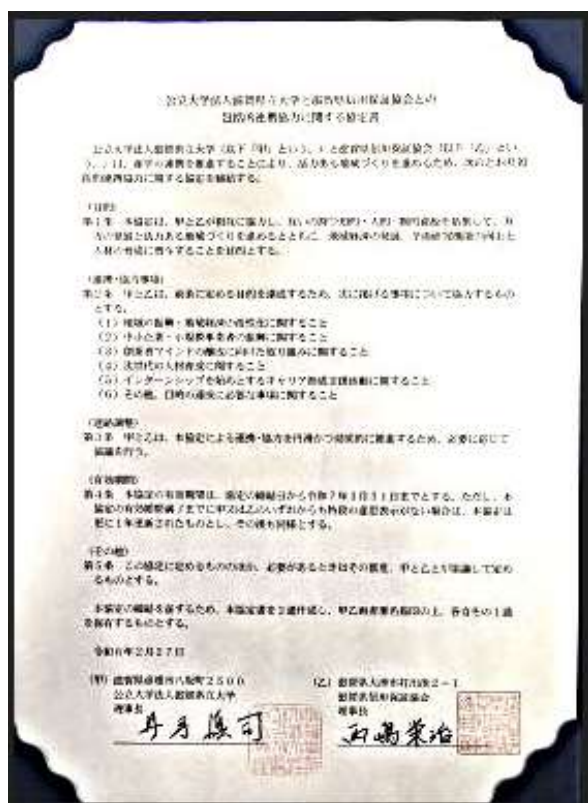
つくる未来展(米原会場)の様子

2-5-2 県内自治体等との連携

本学は県内市町等と連携協力して地域課題解決に資する取組を行い地域社会に貢献するため、平成 22 年度より連携協力に関する協定の締結を進めている。令和5年度は新たに1 団体包括連携協定を締結した。また、これまでに包括連携協定を締結した市町には、新たな連携取組を生みだすことを目的に連携希望案件の調査を実施した。

(1) 滋賀県信用保証協会との包括連携協定

令和6年2月27日には滋賀県信用保証協会と協定を締結し、①地域の振興・地域経済の活性化に関すること、②中小企業・小規模事業者の振興に関すること、③創業者マインドの醸成に向けた取り組みに関すること、④次世代の人材育成に関すること、⑤インターンシップを始めとするキャリア形成支援活動に関する事に連携して取り組むこととした。滋賀県信用保証協会は信用保証協会法に基づき設置され、県内において信用保証業務を行う団体で、中小企業の活性化や学生の起業支援などで連携を進める。



滋賀県信用保証協会との連携協定書

○これまでに県内自治体等と締結した連携協定の状況

番号	年月日	協定締結相手方
1	H23.3.24	彦根市
2	H23.4.15	近江八幡市、近江八幡商工会議所、安土町商工会
3	H23.6.23	長浜市
4	H24.9.7	東近江市
5	H24.12.27	米原市
6	H25.7.3	守山市
7	H26.6.26	愛荘町、豊郷町、甲良町、多賀町
8	H28.3.30	草津市
9	H31.1.16	大津市
10	R1.9.5	竜王町
11	R2.10.2	高島市
12	R4.3.14	野洲市
13	R4.3.23	日野町
14	R4.4.13	JA 東びわこ
15	R6.2.27	滋賀県信用保証協会

2-6 生涯学習

「公開講座」、「公開講義」はともに、開学翌年の平成8年から実施している長い歴史を持つ事業である。

しかしながら、令和2年度・3年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から学内における対面での取組みはすべて中止となった。令和4年度は、前期にオンデマンド方式での公開講義を開始し、後期から対面方式での公開講義もようやく再開することができた。

(公開講座・公開講義実施状況)

		令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
公開 講座	対面	×	×	×	○
	オンデマンド	×	○	○	○
公開 講義	対面	×	×	○	○
	オンデマンド	×	×	○	○

2-6-1 公開講座

公開講座は、地域住民の知的欲求に応え、知識や教養を身につける学習機会の提供ならびに本学の有する知的財産を地域住民に還元し、開かれた大学として本学の地域社会に対する役割を果たすことを目的として開催している。

(1) 公開講座

令和3年度および4年度は、各学部から推薦された4名の講師による講義を収録しオンデマンド方式で希望者に限定配信した。令和5年度は、各学部から推薦された4名の講師の講義を希望者が対面方式で受講するとともに、オンデマンド方式希望者にも限定配信した。

(環境科学部)

シーボルトが愛したアジサイ

…日本の「アジサイ」から世界の「ハイドランジア」へ

環境科学部 准教授 上町 達也

(工学部)

現代社会の基盤技術になりつつある制御工学

工学部 教授 片山 仁志

(人間文化学部)

台湾の家族の行方:オルタナティブな家族へ

人間文化学部 准教授 横田 祥子

(人間看護学部)

高齢者のフットケア

～フットケアの必要性和家庭でできるケアのポイント～

人間看護学部 教授 新井 香奈子

(2) びわ湖東北部地域連携協議会市民教養講座

同協議会を構成する5大学・短期大学が共同で、地域の方々の学びのきっかけづくりや知的好奇心を満たすことを目的に市民教養講座を実施している。令和5年度は本学から次のとおり参画した。

健やかに老いるための生き方とは

人間看護学部 講師 岡崎 瑞生

ICT(情報通信技術)で多様な教育を!

工学部 准教授 服部 峻

2-6-2 公開講義

公開講義は、本学の講義を地域住民に公開することにより、地域の方々へ学習の機会を提供することを目的としている。

令和2年度・3年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため公開講義を全面的に中止していたが、令和4年度から徐々に再開している。令和5年度はオンデマンド方式・対面方式で下記のとおり実施した。

・前期公開講義(対面方式) 21 科目

・前期公開講義(オンデマンド方式)

環境化学 I

環境科学部 教授 丸尾 雅啓

美術史B 女性像から絵の意味を考える

人間文化学部 教授 亀井 若菜

・後期公開講義(対面方式) 36 科目

・後期公開講義(オンデマンド方式)

電子と化学結合

理事・副学長 松岡 純

2-6-3 リカレント教育

VUCA の時代と言われ、不確実で将来の予測が困難な状況にある今日、持続可能に発展する社会づくりのためには現役時代のリカレント教育が不可欠で、大学の果たす役割も大きい。

本学では、令和3年3月24日に包括連携協定を締結した滋賀県中小企業家同友会とリカレント教育プログラム開設について協議を進め、令和4年度から「滋賀中小企業リカレント教育プログラム」を開講している。

このプログラムは、中小企業の社員教育のニーズに合わせたリカレント教育として、学生との共同の学びの場のプログラムを構築し、社員の自己啓発的な研修プログラムとは一線を画した、所属企業の未来を拓く人材(課題解決型の人材、新しいビジネスを創り上げる人材)の育成を図るプログラムとしている。

また、到達目標を変化する時代における未来を見据えた「創造力」の獲得とし、以下の能力の獲得を目指している。

- (1) 社会変化に対応するための、物事の見方、考え方をリフレッシュした「発想力」
- (2) 近未来の社会や技術に対する情報収集能力や知見を持つ「未来を見据える力」
- (3) 新たなプロジェクトを提案し、具現化をマネジメントする「企画力・推進力」
- (4) 社内外の人材や大学などの教育機関との連携を構築する「ネットワーク力」

2年目となる令和5年度は、令和5年11月から令和6年2月まで8回にわたって実施し、企業から9名、本学学生から3名の合計12名が受講した。

○参加者の感想

新たな視点からの物事の見方や考え方を学ぶことができた。今までは、目先にある分かりやすいことや、滋賀に住んでいるがあまり地域や自分の居住エリア以外に目を向けて来なかったが、広く視野を持つ事、この先どんな事ができるだろう、活用できる事があるのではないかと考えるようになった。

2-7 他大学等との連携

2-7-1 環びわ湖大学・地域コンソーシアム

県内14大学と県、市町、関係団体で構成される環びわ湖大学・地域コンソーシアムにおける以下の大学地域連携事業に他大学等と連携して取り組んだ。

○令和5年度の本学に関わる主な事業

①大学地域連携課題解決支援事業

令和5年度の実施事業13件に助成

②学生支援事業

「SDGs ワークショップ～滋賀のサーキュラーエコノミーの実践～」をコンセプトに、プログラムに参加している大学生が東近江市での地域と一体となった資源循環の取り組みや無印良品の新店舗で実施できる資源循環に資するワークショップを考え、実施した。

③単位互換事業

13大学から対面授業や遠隔授業により実施する67科目の提供を受け開講した。7大学27名（重複あり）が出願し、単位付与者は17名であった。

④政策研究事業

滋賀県からの委託事業である「大学間連携による教育プログラムづくりに関する政策研究事業」について、今まで以上に大学間、産業界、自治体等が連携を強め、未来に求められる人づくりに向け、具体的な教育プログラムづくりを研究した。

2-7-2 びわ湖東北部地域連携協議会

びわ湖東北部地域の5大学、県、3市、2商工会議所、環びわ湖大学・地域コンソーシアムの連携によって、SDGsを活用した豊かに働き生活できるびわ湖東北部地域の創出に向けて、次の事業に取り組んだ。

○令和5年度の本学の関わった主な事業

・地域コミュニティの活性化のため、前記2-6-1 公開講座の項に記載のとおり、生涯学習事業として「市民教養講座」を共催実施した。

・SDGs関連として、「キャンパスSDGsびわ湖大会2023」、「SDGsをテーマとした共同講義」、「FD・SD研修会」を共催実施した。

3 スタッフ紹介

3-1 地域共生センターの体制【2023 年】

センター長（地域連携・高専開設準備担当理事）中嶋 毅	
教授 鶴飼 修	地域教育プログラム総括、地域共生論、近江楽士（地域学）副専攻、近江環人地域再生学座、近江楽座等
特任講師 上田 洋平	地域教育プログラム、地域共生論、近江楽士（地域学）副専攻、近江環人地域再生学座、近江楽座等
特任准教授 西岡 孝幸	近江（地域学）副専攻、地元就職・起業支援等
地域連携・研究支援課課長 山中 智栄子	事務総括
副主幹 川原 宗	地域連携総括、他大学との連携等
副主幹（主任調査研究員） 秦 憲志	調査研究、近江楽座、地域教育プログラムの支援等
副主査 森久 友紀子	生涯学習、近江楽座等
特任職員 谷口 嘉之	SDGs、地域連携等
職員 小川 利佳	地域課題科目、近江楽士（地域学）副専攻等
職員 横大路 まゆ	近江環人地域再生学座事務等
職員 柴田 豊美	地域基礎科目
特任職員 杉本 一良	生涯学習事務
職員 杉田 弘一	近江楽座事務
職員 中山 ゆず香	交流センター管理担当

地域共生センター運営委員		
環境科学部	教授	伴 修平
	講師	吉川 直樹
工学部	教授	乾 義尚
	教授	奥 健夫
人間文化学部	教授	印南 比呂志
	准教授	萩原 和
人間看護学部	准教授	米田 照美

地域共生論運営委員		
環境科学部		
環境生態学科	講師	工藤 慎治
環境政策・計画学科	講師	吉川 直樹
環境建築デザイン学科	講師	高屋 麻里子
生物資源管理学科	准教授	皆川 明子
工学部		
材料化学科	准教授	加藤 真一郎
機械システム工学科	准教授	大浦 靖典
電子システム工学科	准教授	坂本 眞一
人間文化学部		
地域文化学科	准教授	櫻井 悟史
生活デザイン学科	講師	大江 由起
生活栄養学科	講師	畑山 翔
人間関係学科	講師	中村 好孝
国際コミュニケーション学科	准教授	山本 薫
人間看護学部		
人間看護学科	教授	伊丹 君和
	准教授	米田 照美
	講師	関 恵子
	講師	千田 美紀子
地域共生センター		
	教授	鶴飼 修
	特任講師	上田 洋平
	主任調査研究員	秦 憲志

近江楽座専門委員会（※委員長）		
環境科学部		
環境生態学科	教授	浦部 美佐子
環境政策・計画学科	准教授	林 宰司
	准教授	平岡 俊一
環境建築デザイン学科	教授	金子 尚志
	講師	迫田 正美
工学部		
機械システム工学科	准教授	河崎 澄
電子システム工学科	教授	柳澤 淳一
人間文化学部		
地域文化学科	教授	石川 慎治
生活デザイン学科	教授	印南 比呂志※
	准教授	佐々木 一泰
人間関係学科	准教授	原 未来
人間看護学部		
人間看護学科	教授	伊丹 君和
	教授	横井 和美
地域共生センター		
	教授	鶴飼 修

SDGs 専門委員会委員		
地域共生センター	センター長	中嶋 毅
環境科学部	教授	瀧 健太郎
工学部	准教授	杉山 裕介
人間文化学部	教授	市川 秀之
人間看護学部	准教授	米田 照美
地域共生センター	教授	鶴飼 修
	特任講師	上田 洋平
	事務局各課職員	

3-2 教職員の活動

3-2-1 受賞、著書、論文

- (1) 秦憲志 「鳥取県羽合平野における戦後期・土地改良事業と条里地割の継承」 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿) 選抜梗概 (農村計画) 125-128 (2023年9月)
- (2) 田中惇敏、鵜飼修「地方におけるコレクティブ・インパクトを用いた政策形成の可能性ーけせんぬま子育てコレクティブインパクトプラットフォーム“コソダテノミカタ”を事例として」地域デザイン(23) 277-298(2024年3月)

3-2-2 学会発表

- (1) 谷口嘉之、平岡俊一 大学の地域連携コーディネーターの2種の類型とその行動様式について 日本地域政策学会第22回【東京】大会 (2023年7月9日)
- (2) 鵜飼修、程尾 好貴、田中惇敏「空き家対策におけるコレクティブ・インパクトモデルの提示」2023年度都市住宅学会大会 審査付論文・論説(論文集掲載) (2023年12月)
- (3) 田中惇敏、鵜飼修「多様な主体の参画による子育て拠点の創造プロセス」2023年度都市住宅学会大会 審査付論文・論説(論文集掲載) (2023年12月)
- (4) 「人口減少社会において地域を基盤とした学習は地域と大学に何をもたらすのか？」秋吉恵、森田恵、奥貫麻紀、櫻井典子、秦憲志 第30回大学教育研究フォーラム 企画セッションⅡ (2024年3月14日)

3-2-3 研究会、講演会、特別講義等での発表

- (1) 谷口嘉之 2023.4.27・28 桜花学園高等学校 滋賀で考えるSDGs ～2030年を自分たちの手でどんな社会にするか？
- (2) 上田洋平 2023.5.29 全国農村プロデューサー養成講座 入門コース 風土にねざしたビジネスモデルを立て直す
- (3) 上田洋平 2023.8.23 滋賀県産業教育振興会総会「この一人」から地域は変わる
- (4) 上田洋平 2023.8.31 地域活性化センター 全国地域づくりリーダー養成塾 地域文化を未来につなぐ
- (5) 上田洋平 2023.9.8 近畿地区社会教育研究大会 基

調講演 ここで・ともに・ぶじに・生きる

(6) 上田洋平 2023.10.7 いい街発見地方の暮らしフェア 2023 地方で見つける“ビジネス”モデル

(7) 上田洋平 2023.10.21 彦根文芸第41号発表会講演 五感と文芸

(8) 上田洋平 2023.11.12 日野原重明記念新老人「滋賀の会」講演会 ふるさと絵屏風で記憶をつなぐ

(9) 秦憲志 2023.11.15 滋賀県職員研修「協働を進めるための基礎講座」講師 公益財団法人淡海文化振興財団

(10) 上田洋平、谷口嘉之 2023.12.2 長浜バイオ大学・びわ湖東北部地域連携協議会「近江でのSDGsの実践」

(11) 鵜飼 修 2023.12.20 社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会事務局 令和5年度第3回重層的支援体制整備事業にかかる勉強会・第2回市町担当者会議福祉をこえる!発想力とつながる力～重層的なしくみの中で共生の地域づくりを考える～講演

(12) 上田洋平 2024.2.6 乙訓社会教育委員等連絡協議会研修会 絵画制作を通じた地域づくり

(13) 上田洋平 2024.2.17 栗東市生涯学習のまちづくり講座 居合わせから仕合わせを

3-2-4 研究資金・補助金等

- (1) 秋吉恵、秦憲志、森田恵、櫻井典子 科学研究費補助金「大学が関わる地域を基盤とした学習による社会関係資本の醸成過程の実証的研究」2023年度 25万円(分担)
- (2) 寄付講義・彦根商工会議所「世界遺産のまちづくり・ひとづくり」2023年度100万円
- (3) 奨励寄付金 オリエンタルコンサルタンツ 2023年度 30万円

3-2-5 社会への貢献(各種委員会など)

◆鵜飼 修

- (1) 長浜市総務部 長浜市総合計画審議会委員
- (2) 特定非営利活動法人おおたき里づくりネットワーク理事
- (3) 大阪経済大学 非常勤講師
- (4) 長浜市長寿推進課 令和5年度地域専門職連携会議研修会講師
- (5) 長浜市未来創造部 長浜市未来創造会議委員

- (6)長浜市未来創造部 長浜市地域経営改革会議委員
- (7)滋賀県健康医療福祉部「健康しが」企画運営会議座長
- (8)NPO法人大牟田・荒尾 炭鉱まちファンクラブ副理事長
- (9)湖南市総合政策部「まち・ひと・しごと戦略茶話会」委員
- (10)特定非営利活動法人 大森まちづくりカフェ 代表理事
- (11)東近江市 令和5年度東近江市わくわく市民活動支援補助金審査委員会委員
- (12)公益財団法人東近江市三方よし基金 令和5年度東近江市コミュニティビジネススタートアップ支援事業選考委員およびアドバイザー
- (13)多賀町企画課 久徳周辺地区都市再生整備計画事後評価委員会

◆上田洋平

- (14)近畿財務局 大津財務事務所 近畿財務局アドバイザー
- (15)彦根市産業部指定管理者候補者選定委員会 委員
- (16)野洲市総合計画・総合戦略評価委員会 委員
- (17)びわこ放送株式会社番組審議会 委員
- (18)滋賀大学 非常勤講師
- (19)滋賀県文化スポーツ部 滋賀県文化審議会委員
- (20)滋賀県文化審議会 委員
- (21)彦根市観光文化戦略部指定管理者選定委員会委員
- (22)彦根市歴史的風致維持向上協議会委員
- (23)滋賀大学 令和5年度社会教育主事講習会 講師
- (24)近畿地区社会教育委員連絡協議会 記念講演講師
- (25)滋賀県教育委員会 しがアントレプレナーシップハイスクール事業における連絡協議会委員
- (26)米原市教育委員会 米原市社会教育委員
- (27)米原市ルッチまちづくり大学コーディネーター
- (28)高島市社会教育委員の会 委員長
- (29)市民大学たかしまアカデミーコーディネーター
- (30)滋賀県琵琶湖環境部 滋賀県環境審議会専門委員
- (31)滋賀県琵琶湖環境部 マザーレイクゴールズ推進委員会
- (32)滋賀県琵琶湖環境科学研究センター 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター評議員
- (33)びわこ成蹊スポーツ大学 非常勤講師
- (34)滋賀県農政水産部 滋賀県ふるさと・水と土保全対策推進懇話会委員
- (35)湖南市 湖南市ふれあい公園づくり検討委員会委員

- (36)滋賀県 死生懇話会 講師
- (37)公益財団法人未来工学研究所（文部科学省）「科学技術と社会と関係性を踏まえた中長期的に振興すべき研究テーマの抽出」における「横断的社会課題分科会」委員
- (38)長浜バイオ大学「近江でのSDGsの実践」講師
- (39)近畿地方整備局「丹生ダム建設事業の中止に伴う地域整備」に関するファシリテーター

◆西岡孝幸

- (40)滋賀労働局 地域雇用活性化支援アドバイザー
- (41)大津市 非常勤特別職
- (42)滋賀創業サポートネットワーク会長

◆秦 憲志

- (43)アーバンデザインセンターびわこ・くさつ事業運営懇話会委員
- (44)大津市市民活動センター第三者評価委員会委員
- (45)滋賀県協働プラットフォーム コーディネーター
- (46)愛荘町みらい創生会議会長
- (47)特定非営利活動法人ヴォーリス建築保存再生運動一粒の会理事

◆谷口嘉之

- (48)長浜市市民協働部長浜市市民活動団体支援事業審査会委員
- (49)桜花学園高等学校 SDGs出前講座 新入生オリエンテーション講義 講師
- (50)彦根市立若葉小学校 学校運営協議会委員
- (51)滋賀県立河瀬中学校・高等学校 学校運営協議会委員
- (52)米原市政策推進部 公共施設予約システム導入および運用業務プロポーザル選定委員
- (53)独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 第22回滋賀県障害者技能競技大会に係る協議専門委員
- (54)「SDGs Quest みらい甲子園関西エリア大会」実行委員会
- (55)公益社団法人日本青年会議所 2023年度褒賞公開審査会審査員
- (56)2023年度褒賞公開審査会審査員 サステナブル高島ネットワーク会議委員

(57) 滋賀県教育委員会(滋賀県立虎姫高等学校) しがアントレプレナーシップ育成プログラム指導助言者
長浜バイオ大学「近江でのSDGsの実践」講師
(58) 高島市政策部 サステイナブル高島ネットワーク会議委員

3-2-6 マスメディアとの対応

- (1) 上田洋平 2023/6/17 近江八幡「西の湖」語り部 男性の資料 引き取り手探してます 京都新聞
- (2) 鶴飼修 2023/8/24 行政デジタル化や民活導入 初の地域経営改革会議 中日新聞
- (3) 上田洋平 2023/9/18 いい街発見!地方の暮らしフェア 2023 地方でみつける“ビジネス”モデル 中日新聞(愛知県版)
- (4) 谷口嘉之 2023/9/22 たき火囲んでほっこり 県立大で学生ら交流イベント 中日新聞
- (5) 上田洋平 2023/10/19 全国の自治体が移住へ魅力 PR 名古屋でフェア 中日新聞(愛知県版)
- (6) 鶴飼修 2024/2/25 七輪を囲んで楽しく談笑 彦根県立大生企画の交流カフェ 中日新聞
- (7) 上田洋平 2024/3/6 「ふるさと絵屏風」余呉地区版完成 ストーリーある「絵画ドラマ」に 中日新聞
- (8) 谷口嘉之 2024/3/30 SDGs QUEST みらい甲子園 SDGs アクションで、輝く未来を仲間と共に 実行委員長からの総評 朝日新聞

3-3 2024 年度教職員メッセージ

◆鶴飼 修◆

2020 年 8 月から多賀町大滝地域での活動に携わらせていただいている。多賀町は多賀大社のある多賀地域と犬上川流域の大滝地域で構成される。それぞれに小学校が 1 校ずつあるが、多賀小学校は近年、宅地開発などで生徒が急増し、人口増加で話題にもなった。一方で大滝小学校は、50 名を切る生徒数で人口減少が進みつつある。

この大滝地域で住民や役場の方々と 1 年 8 ヶ月議論し、その議論した内容を実践する仕組みとして、2022 年 4 月に NPO 法人を設立し、地域おこし協力隊の制度を活用して活動を展開している。

最初に取り組んだ「おおたき給食弁当」は、大滝小学校の美味しい給食をモチーフに、月 2 回、1 回あたり 100 食程度

の販売を行い、食に困っている方等に好評となっている。

月 1 回、第四日曜日に開催している子どもの居場所事業「おおたきものづくりラボ」は、地域資源を活かしたクラフトや食事、お菓子づくりを開催しており、1 回の利用を 2 千円としたにもかかわらず、ほぼ毎回、定員オーバーで抽選となる状況となっている。

景勝地「大蛇ヶ淵」に建つ大滝神社に設置した自動販売機は、忠犬「小石丸」伝説からキャラクターを創り、グッズや御朱印を販売して、話題となっている。

免許返納などで移動に困っている高齢の方のための、移送サービスは、制約が多く、なかなか利用する方が出てこなかった。「買物支援」に発想を転換したところ、徐々に利用者が増えてきている。

町と連携し、地域おこし協力隊制度を活用したスタッフの確保を試みているが、住宅の確保が課題で、使用可能な空き家をいかに確保するかが課題であるが、空き家バンクの事業者や空き家活動の実践者との連携体制を構築したことで、物件情報の入手や、住民からの紹介も得られるようになってきた。

このように、地域の発意により生まれた多様な活動を実践し、地域が少し元気になってきたように感じ、うれしい限りである。

課題は、地域おこし協力隊の任期後の自立を如何にして地域で実現できるかであり、その一環として、地域に残された酒蔵の再生、酒造り事業の立ち上げを目指している。

◆上田 洋平◆

「“ここで学びたい!”という若者がいれば、必ず、その学びが実現できるようにしてやらなければならない」という「魔法」あるいは「呪い?」をかけられたのが教員稼業というものである。その魔法によって勢い余って彦根の中心市街地銀座商店街にある空き店舗を借りることになってしまった。

ここは二重の意味で困難なフィールドである。ひとつには、中心市街地の活性化というのはもとより一筋縄ではいかない課題であり、もう長いこと様々な試みがされつくしてなお解決を見ていないフィールドである。第二に、しかも自分が市民として家族と共にすむまちにあるフィールドである。ここでしくじると「アイツはよそでは偉そうにまちづくりとか言っているけれど、自分の住んでいるまちの課題ひとつ解決できていないじゃないか」と後ろ指さされることになる。「そこに住んでいる弱み」というものがある。火傷するのはわかっている。なのに片足をつつこんでしまった。やれるだけやるしかない。

彦根市は人口 11 万のまちに国公私 3 つの大学がある。全

員が住民というわけではないが、そこにいるということであれば、7000人近い学生がいる。人口当たりの比率でいえば、立派に学生のまちである。大学近辺ではどこの店にも学生バイトの姿がある。下宿していれば家賃も払うしスーパーで買い物もする。通学する子は運賃を払う。ということで、まちの経済に大きく貢献している。

ただ、中心市街地でその姿を見ることはほとんどない。ある地方国立大学の先生が「いまの学生は下宿先と、バイト先、そして大学キャンパスのトライアングルのなかに引きこもっている」と、言っていた。確かに今どきの中心市街地には、行きたい店も、行く用もないかもしれないけれど、学びのためにはちょっともったいないと思う。本学は「キャンパスはびわ湖・テキストは人間。」とうたっている。

ミチ→イチ→ミセ→マチというふうには商店街はできてきたのであろう。しかし今や多くのミセはシャッターを閉めて高齢の店主のウチになっている。“閑静な商店街”になっている。商店街の昔を知る世代は「Make Ginza Great Again!」を夢見るけれども、往々にしてそれが足かせになりえないものねだりにつながっている。むしろ、いま現在の事実を元手に出発する若者たちの方がうまくやるのではないかと思う。

かわかることになったからには、ということで、名実ともに学生のまちを実現すべく、自分で勝手に「彦根銀座界隈学生街化計画」と名付けて、いろいろなことを画策しているが、満身創痍になりそうだ。

各種審議会の委員や様々な講演会の講師として引き続きご用命を頂いた。

まったくもって文系の私に国の方から「科学技術未来予測」にかかるご依頼が来たので当然引き受けた。社会教育にかかる相談や講演オファーが増えてきた。「まぜて・ちらして・つなぐ」とか「風土に根ざした“ビジネス”モデル」とか「ここで、ともに、ぶじに、生きる」など、私が提唱しているキーワードがウケるらしい。もともと自前でやっていたのにそれを放擲して、長らく学校・家庭にアウトソーシングして（押し付けて）いた人材育成を、本気で、地域で引き受けていかねばならない。

◆西岡 孝幸◆

ソーシャル・アントレプレナー（SE）コース担当の西岡です。SE コースは2016年度に設置しましたが、新たに起業家教育に重点を置いたコースに改編してから、ようやく6年半を終えました。最近受講者数は少なくなりましたが、ビジネスを本気で学ぼうとする学生も少しずつ増えてきました。

SE コースは初級コース（「ソーシャル・ビジネス概論」、「MBA入門」）と上級コース（「ビジネス・プランニング」、「地域デザイン D」）に分かれています。初級コースは起業家精

神の醸成を目的に、上級コースは起業家育成を目的としています。特に「地域デザイン D」では受講生が企業の新規事業にかかわり、事業化のプロセスを実践的に学ぶ機会を設けています。

上級コースの受講生の中には起業準備に入ったものもいますが、多くは初級コースの受講で終わるケースも多いのです。簡単ではありませんが、これからも、初級から上級コースへ流れる学生を増やすべく工夫が必要だと感じています。最近「受講をきっかけに新聞に目を通すようになった」や「簿記3級の勉強を始めた」などの声を聞くようになり、受講生の変化を感じるようになりました。

◆小椋 茂◆

本学は、開学以来「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」をモットーに、地域とのつながりを大切にしてきました。地域共生センターは、その最前線で業務を行い、また、長年地域の窓口として活動しています。これからも、地域の方々に長く愛される大学として日々研鑽していきたいと思ひます。

“歩みは共に。今までも、これからも。”

◆川原 宗◆

地域連携・研究支援課でSDGs、地域との連携や包括協定等の業務に携わっています。

本学は「地域に根差し、地域に学び、地域に貢献する」ことをモットーに地域貢献活動に取り組んでいます。大学が持つ知を地域に還元する、地域で実践することが求められている時代において、県立大学ならではの「地域とのつながりと地域の信頼」は、大学間競争の時代においても、本学の大きな強みになると考えています。地域の総合大学として、シンググローバル、アクトリージョンということを意識して取り組んでいます。

滋賀県立大学の地域活動にご協力をお願いします。

◆秦 憲志◆

令和5年度を振り返って、コロナ後の活動の広がりといひまって様々な準備活動が出来た年であった。

授業の関係では、「地域共生論」の分担担当4年目を無事終えることができた。また、次年度に開講予定の「近江の美」について、新たに滋賀県立美術館と琵琶湖文化館に連携協力を依頼して、本学人間文化学部の教員を中心に環境科学部の教員の協力を得て、運営委員会を組織し、開講に向けての準備を進めることができた。

近江楽座については、2024年に20周年を迎えることから、2023年末～2024年初め、交流センターホワイエにて

近江楽座 20 周年 写真展「記憶・語り・つながり」を開催することができた。さらに、近江楽座の発展を図るため、卒業生の協力を得て、スキルアップサポート会議をスタートさせた。卒業生との連携では、活動成果報告会と中間報告会にゲストとして卒業生を招き、コロナ禍で課題を抱えた学生たちの活動を応援していただいた。その他、「あかりんちゅ」の第 13 回毎日地球未来賞 奨励賞の受賞や「BAMBOO HOUSE PROJECT」の学生ボランティア団体活動レポート優秀賞の表彰など、嬉しい出来事が重なった。

地域連携・研究については、湖北アーカイブ研究所の膨大な所蔵写真の整理に向けて、本学が協力して地域の記録写真のデータベース化の研究を行う糸口を見出すことができた。科研費・個人研究では、古写真から読み解く地域の風景について鳥取県で現地報告会を行った。また、科研費・分担研究では、神奈川県と新潟県の現地調査を行うことができた。引続き、これまでの活動の成果とりまとめと発信、インプットのための調査や新たな活動の準備を進めていきたい。

◆高谷 美穂◆

地域連携・産学連携を担当しています。私は滋賀県立大学の卒業生でもあるのですが、私が入学したまさに平成 8 年度前期から、本学の公開講義が 34 科目でスタートしています。コロナ禍ではオンデマンドで動画配信を実施する等の方法で行っていましたが、ようやく対面で実施できるようになりました。受講生の方々と久しぶりにお会いすることができ、うれしく思っています。

さて、滋賀県立大学は、まもなく創立 30 周年を迎えます。地域や社会で活躍する卒業生を目にする機会も増えました。今後も地域に根差した教育研究活動や地域連携活動を展開していきたいと思っています。

◆杉本一良◆

令和 3 年度から「公開講座」と「公開講義」に関する業務を担当しています。

「公開講座」につきましては、令和 3 年度と令和 4 年度は各講座を収録したものをオンデマンド方式で限定配信する形で実施していましたが、令和 5 年度は対面方式で公開するとともに、その様子を収録したものをオンデマンド方式で限定配信する形へと変更いたしました。また、「公開講義」につきましては、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止となっておりますが、令和 4 年度から再開しています。

まだまだコロナ前の状況には及びませんが、様々な取り組みが少しずつ従来の形へと戻ってきています。今後も皆様の意見をお聞きして、さらに充実した運営ができるように工夫を

重ねていきたいと考えております。

◆杉田弘一◆

近江楽座の事務局スタッフとして、学生が主体となって行う地域活動の運営管理や広報面でのサポート等を担当しています。今年度も、近江楽座の学生たちの活躍が新聞やテレビなどで多く取り上げられました。その数は事務局が把握しているだけで約 30 件ありました。こちらに勤務して 2 年になりますが、知り合いから記事や放送を見たよと声をかけていただくことも増え、一般の方々にも活動が届いていることを嬉しく思います。

さて、近江楽座の各プロジェクトでは、それぞれの SNS を使って積極的に情報発信を行なっています。そのサイトからは、大変な活動を行っている様子だけでなく、学生たちの躍動感や楽しさが伝わってきます。近江楽座のホームページにも、各プロジェクトのサイトリンクを貼っていますので、気になったプロジェクトのサイトを訪れていただけたらと思います。

私たちも学生たちの熱意に日々、刺激を受けています。今年、近江楽座が発足 20 年目を迎えましたが、この活動がこれからも持続・発展できるよう、近江楽座にご注目いただけたらと思います。そして、みなさまからのご支援が活動の大きな力となりますので、本学の未来人材基金までご寄付を賜りますようよろしくお願いいたします。

◆中山 ゆず香◆

令和 3 年度から交流センターの管理を担当しております。今年度は交流センターの天井等耐震化改修工事のため 5 月～12 月まで、交流センターホール、ホワイエは利用ができませんでした。工事も無事終了し、交流センターが増々、学生や卒業生、地域の方を繋ぐ「交流の場」として未永く在り続ける事ができればと思います。

今後も利用される方の舞台がより良くなるようなサポートができるよう努めてまいります。

◆谷口嘉之◆

私が地域共生センターで地域連携コーディネーターとして働くようになって 6 年が経ちました。直近の 2 年は大学院にも籍をおき、自身の仕事である大学の地域連携における課題やその中でのコーディネーターの思考・行動様式について研究を行ってきました。その研究課程で気づいたことの一つは、「多くの地域の人たちは、大学に相談したいことがないと大学に来ることができない」ということでした。

地域で何かやりたい（ような気がする）という段階で

も大学に来ていただき、教職員や学生と話しているうちにそれが具体化していき、最終的には大学との連携事業に発展していくようなことができないだろうかと考え、2023年の9月に始めたのが「県大 TAKIBI TALK」という取り組みです。文字通り、大学構内で焚き火を囲み、大学の教職員・学生、地域の人が集まり対話する機会をつくるだけのイベントです。さらに言えば特に話す必要もなく、ただ焚き火を見ながら集まった人たちの話を聞いているだけでも構いません。余り目的意識を持たず、上記の狙いさえも前面には出さずに、偶然集まった人たちが同じ場所と時間を共有する。飲食も少し抑え気味でお願いしていて、話すことや居ることを中心とする集まりにしています。こんな緩い企画に共感してくれる人が何人いるのかと思いながら始めましたが、ふたを開けてみると毎回 30～40 人の人たちが集まってくれました。意外に大学にもこういう場合は他になく、潜在的に求められていたのかもしれません。残念ながら、今のところ「県大 TAKIBI TALK」からプロジェクト的なものが始まったという実績はありませんが、小さな出会いやきっかけづくり程度の役割は果たしているようです。

焚き火を囲んで話していると、目の前の人やどんな人か分からなくても話せてしまうという不思議なことが起きます。30 分くらい教員と話し込んでいた学生に「〇〇先生とお話楽しかった？」と聞くと、「えっ、あの人先生だったんですか？」ということもありました。すっかり外から来られた地域の人だと思って話していたようです。学生同士も学部学科が違うとほとんど交流がなかったり、教員の先生同士もそんなことをおっしゃっておられたりします。小規模ながら滋賀県立大学は 4 学部 13 学科を擁する総合大学です。その特徴をもっと活かすためにも相互のコミュニケーションが重要ではないかと思います。こんな偶然から生まれる対話の時間をこれからも大切にしていければと思います。

◆小川 利佳◆

近江楽士・地域基礎科目の業務に 10 年携わってきました。講義補助や資料作成を通して学生たちをサポートし、彼らの成長を支えることが、私にとって大きなやりがいとなっています。特に起業を目指す学生たちとの日々は、貴重な経験ばかりです。柔軟な発想で新しいアイデアを次々に出す学生、一方、そのアイデアの実現可能性を冷静に評価し、具体的な実行計画を立てることに貢献する学生。意見交換や対話を通して、彼らの多様な価値観に触れることができ、私自身の視野が大きく広がりました。また学生たちの熱意や斬新なアイデ

アに触発され、新たな挑戦への意欲を高めることができました。彼らの頑張りから、人との関わり方や成長の大切さを改めて実感しています。この先も彼らに負けないよう、日々精進を続けていきたいと考えています。

◆柴田 豊美◆

私が“地域共生論”で学んでいること。

「将来何になりたいの？」と聞いてみると、みんな明確な答えが返ってくることに驚きです。夢をもって学んでいる学生を応援したいと感じています。成長していくうえでコミュニケーションの大切さを知り、楽しさも一緒に感じて欲しいと思います。

私が“世界遺産のまちづくり・人づくり”で学んでいること。毎回ご登壇いただくゲスト講師の講義を聞き、資料を読んで学生さんとは違う目線で見て感じ、大変勉強になります。“彦根城を世界遺産に!”の裏に隠れている大人の事情(笑)企業の努力、自治体の努力がとても面白いです。

「柴田さんは彦根のことよく知っているね」と言われることが大変誇らしく、それを更新していくことが目標であり、快感です。学生さんと一緒に学ぶ機会を与えていただき、ステップアップしていけることに感謝です。

これからも頑張りますので、宜しくお願いいたします。

◆井上 菜津水◆

令和6年度10月から近江環人地域再生学座の事務局員として関わらせていただいております。近江環人地域再生学座は、地域資源を活用した、地域課題解決や地域イノベーションを興し、新しい地域社会を切り拓く人材の育成を目的とした教育プログラムです。民間企業、行政、NPO、自営業、大学院生など、多様な立場やスキルの方が共に学びを深めています。

近江環人地域再生学座は、世代の異なる学生が集まり、互いの経験や知識を共有し、新たな価値観を生み出す素晴らしい学びの場です。特に地域活性化という共通の目標を持つ学生同士が集まれば、より深い学びや地域貢献につながると思います。

受講生の皆さんが学びを深めたり、新しいことに挑戦したりできるよう、事務局の業務を通してサポートしていきたいです。

地域共生センター HP



滋賀県立大学SDGs宣言

- S 滋賀県立大学は「キャンパスは持続。テキストは人間。」をモットーに
- D 誰一人取り残さない持続可能な社会を目指し
- G グローカルな思考と実践をもって
- S 世界と地域の発展に貢献します